

博士論文要旨

「ピア・グループ」による
メディア・リテラシー学習の支援に関する研究

石田喜美*

1. 研究の目的と方法

本研究では、社会構成主義の立場から、これまでのメディア・リテラシー教育が前提としてきた学習者モデルの問題点を明らかにし、代案となるモデルを明示した上で、これに基づくメディア・リテラシー教育を追求した。具体的には、「メディア・リテラシー教育においてどのような学習環境のデザインを行うべきか」という問いを研究課題として設定し、この問いに答えるかたちで理論研究・調査研究を行った。

本研究ではまず、国語科教育など、正規のカリキュラムの中で行われてきたメディア・リテラシー教育（以下、教科教育としてのメディア・リテラシー教育）と青少年教育を中心に行われてきた学校外教育活動としてのメディア・リテラシー教育（以下、学校外教育活動としてのメディア・リテラシー教育）のこれまでの成果と動向を検討し、これらのメディア・リテラシー教育において前提とされている学習者モデルの問題点を明らかにした。これまで、教科教育としてのメディア・リテラシー教育と学校外教育活動としてのメディア・リテラシー教育は、相反する学習者モデルに基づいて理論や実践を展開してきた。前者のメディア・リテラシー教育は、国家やメディア産業といった権力主体から、学習者自身を取り巻くジェンダーや人種といった社会的カテゴリーまで、さまざまなレベルの社会・文化から一方的に影響を受ける学習者（「社会・文化を受容する学習者」）を前提としてきた。これに対し、後者のメディア・リテラシー教育は、「社会・文化を創造する学習者」を前提として、学習者自身による自分自身の文化の創造や、新たなメディアと人間との関係性の構築を目的としたメディア・リテラシー教育を行ってきた。これら二つの学習者モデルはメディアと人間との関わりにおける異なる側面を視野に置いているため、前者の理論や実践と後者の理論や実践は二

*人文科教育学

極化している。

本研究は、このようなメディア・リテラシー教育における学習者モデルの二極化を問題視する。そして、こうした事態を改善するため、「社会・文化を受容する学習者」と「社会・文化を創造する学習者」という二つの側面を視野に置いた新たな学習者モデルとして『『現実』を構成する学習者』というモデルを提示する。『『現実』を構成する学習者』とは、我々が既存の社会・文化の維持と新たな社会・文化の創造という、相反する側面を持つ「現実」を日々の実践の中で構成するという事実に注目した学習者モデルである。本研究では、以上の議論を踏まえつつ『『現実』を構成する学習者』という学習者モデルに基づくメディア・リテラシー教育の目標を考察し、メディア・リテラシー教育の目標を、「実践的倫理知」(practical-moral knowledge) (Shotter, 1993)¹⁰の生成として規定した。ポストモダンの思想的潮流をとりいれた近年のメディア・リテラシー教育研究は、実践的倫理知の生成をメディア・リテラシー教育の目標とすべきだと主張している。実践的倫理知とは、「事物に関する知」(knowing that) や「方法に関する知」(knowing how) とは異なる第三の知、「内側から知ること」(knowing from within) であり、〈いま—ここ〉の場における他者との関係に依存した倫理的な知であることを特徴とする知である。これまでのメディア・リテラシー教育は、体系化されたかたちでの概念理解をメディア・リテラシー教育の目標としてきた。これに対し、実践的倫理知の生成を目標とすることは、体系化された概念としての知ではなく、学習者が自らの活動の中で生成するインフォーマルな知に注目することを意味する。本研究の課題は、インフォーマルな性質を持つ実践的倫理知の生成を支援するメディア・リテラシー教育を実現するための学習環境デザインのモデルを構成することである。

この課題を達成するため、本研究は社会構成主義の立場から研究を行った。社会構成主義とは、「現実」が本質的な実在として存在するという立場をあえて留保し、人々の関係性の中で構成されるものとして「現実」を捉える立場である。社会構成主義の立場を採用する研究は、学習をめぐる社会的な場そのもののありかた、すなわち、学習環境のデザインを明らかにすることで、教育の場で実現すべき学習環境デザインのモデルを構成する。

本研究では、これまでのメディア・リテラシー教育研究の前提を相対的に捉えた上で、メディア・リテラシー教育のために有効な学習環境デザインのモデルを

構成するため、以下の課題を設定した。

- (1) これまでのメディア・リテラシー教育はどのような前提に基づいて行われてきたか。(これまでのメディア・リテラシー教育の前提の相対化)
- (2) 人々の日常的なメディア・リテラシー学習を支えている学習環境とはどのようなものか。(自然発生的な学習環境のモデル化)
- (3) 教育の場において、具体的にどのような学習環境デザインを行うべきか。(学習環境モデルの教育学的意義の確認)

本論文は、これらの課題に対応した三部構成になっている。第一部は第一章・第二章から成る。この部分では、従来のメディア・リテラシー教育における前提を相対化し、具体的な研究課題を設定するための理論的検討を行った(課題(1))。また第二部は第三章・第四章から成る。この部分では、実際にメディア・リテラシー学習が自然発生的に生じている場の調査研究を行うことで学習環境のモデル化を行った(課題(2))。また、第三部は第五章・第六章・第七章から成る。この部分では実際に、課題(2)で構成した「ピア・グループ」というモデルに基づいた学習環境デザインを教育場面において実践し、そこで生じる学習現象を記述した。これによって、「ピア・グループ」という学習環境デザインの教育学的意義を確認した。またこれらの議論を踏まえて、終章で総合的な考察を行うとともに、本研究の成果を確認し、今後の課題を明らかにした。

本論文の構成は以下のとおりである。

序章 本研究の目的と概要

第一章 メディア・リテラシー教育研究における学習者の問題

第二章 方法論的検討

第三章 メディア経験の生成における「ピア・グループ」の機能

—メディア・ファン・コミュニティに関わる女性の語りの生成過程の分析から—

第四章 メディア経験を共有する「ピア・グループ」の構造

—メディア・ファン・コミュニティに関わる語りの全体像の分析から—

第五章 「ピア・グループ」によるメディア・リテラシー学習の支援(1)

—学校における文化系課外活動団体へのインタビュー調査から—
第六章 「ピア・グループ」によるメディア・リテラシー学習の支援（2）
—水戸芸術館現代美術センター教育普及プログラム「高校生ウィーク」
のフィールドワーク調査から—
第七章 「ピア・グループ」によるメディア・リテラシー学習の支援（3）
—学校と美術館との連携による鑑賞教育プロジェクトの実践—
終章 研究の成果と課題

2. 研究の概要

第一章では、メディア・リテラシー教育の先行研究を検討することで、これまでのメディア・リテラシー教育で前提とされてきた学習者モデルの問題点を明らかにし、この問題点を解決するための理論的な考察を行った。これによって本研究における学習者モデル、すなわち「『現実』を構成する学習者」という学習者モデルを示した。さらに、この学習者モデルに基づいたメディア・リテラシー教育の目標を検討し、本研究の追求しようとするメディア・リテラシー教育の目標を、実践的倫理知の生成と規定した。

第二章では、第三章以下で行う調査研究のための方法論的検討を行い、本研究の方法論的立場を明らかにした。具体的には、本研究が採用する認識論的立場である社会構成主義について確認し、その上で社会構成主義的立場からメディア・リテラシー教育を追求するための方法を確認した。次に、本研究が採用する調査方法であるエスノグラフィー研究の記述をめぐる近年の議論を確認した上で、エスノグラフィーの記述をめぐる政治的・倫理的課題について考察し、本研究の立場を明らかにした。

第三章・第四章では、アニメや漫画等のメディア・テキストを愛好する人々の集まりである「メディア・ファン・コミュニティ」に関わる人々を対象としたインタビュー調査を行った。調査結果は、メディア・ファン・コミュニティの学習環境デザインとしての特質を明らかにするため、メディア・ファン・コミュニティの(1)機能と(2)構造という側面に焦点を当てて分析した。具体的には(1)機能については、「メディア・ファン・コミュニティは相互行為の中でいかに機能するか」という視点、(2)構造については、「メディア・ファン・コミュニティは成員の語りにおいていかなる構造を持つか」という視点を設定した。第三章では(1)の観点か

ら分析を行った。この分析から、本研究ではメディア・ファン・コミュニティが個人の経験とマクロな社会とをつなぐ中間項として機能していることを明らかにした。このような中間項としてのコミュニティが存在することで、個人の経験がコミュニティの内部で保護されるとともに、コミュニティとしての語りを通じて、個人の経験がマクロな社会へと連なっていく可能性が開かれる。また、第四章では(2)の観点からの分析を行い、第三章で明らかにしたような機能を支えているメディア・ファン・コミュニティの構造を明らかにした。さらに、このような構造を持つ集団を「ピア・グループ」(peer group)と名付けた。「ピア・グループ」とは、成員相互の階層的地位・経歴・志向性などの類似性にもとづく親和的で対等な結合を特徴とする小集団を意味する(濱嶋・竹内・石川, 1997, p.511.)⁹⁾。メディア・ファン・コミュニティは、メディア・テキストを愛好するという点で類似性を持つ人々の「ピア・グループ」である。第四章では「ピア・グループ」が、「同質性」と「差異性」の共存という構造的性質を持つことを明らかにした。

第五章から第七章は、具体的に学習環境のデザインとして「ピア・グループ」を設定し、「ピア・グループ」によって生じるメディア・リテラシー学習の現象を記述した。

第五章では、メディア・テキストの消費-生産に関わる実践(以下、メディア・リテラシー実践)を中心に組織された、学校内の文化系課外活動団体に対するインタビュー調査を行った。この調査では、文化系課外活動団体の成員によって共同ナラティブが生成される過程を分析した。共同ナラティブの生成過程の分析を行うことによって、学習者が既存のカテゴリーの適用によるトップダウン式の意味生成と同時に、自分たち自身の日常的な経験に基づいたボトムアップ式の意味生成が行っていることを確認した。さらに、意味生成の過程における実践的倫理知の生成過程を具体的に明らかにした。これらの分析結果から、この章では、「ピア・グループ」によって、既存の意味を適用すると同時に、その既存の意味に基づくかたちで、学習者自身によって新たな実践的倫理知が生成される可能性が開かれることを確認した。

第六章では、水戸芸術館現代美術センター・教育普及プログラム「高校生ウィーク2006」の一環として開催されたプログラム「ちへい/cafè」のフィールドワーク研究である。このカフェにおいて生じた相互行為の分析から、相互行為の中で「少女マンガ」というジャンルの「読者」であった小学生の女兒が、自らの立

ち位置を「作者」へと移行させる過程を記述した。これによって、「ピア・グループ」が「読者」の受容的側面と生産的側面とを媒介する役割を果たしていることを明らかにした。また、このような「ピア・グループ」の媒介によって促される「読者」から「作者」へという立ち位置の移行によって、学習者個人が持っていた既存の知が、他者とともに自分のストーリーを共有するための実践的倫理知として位置づけなおされることを明らかにした。

第七章では、実際の教育実践に「ピア・グループ」モデルによる学習環境デザインを適用した事例を分析・報告した。具体的には、学校と美術館との連携によって行われた鑑賞教育の中で、「ピア・グループ」モデルに基づく学習環境デザインを適用し、その成果を分析した。これによって、「ピア・グループ」モデルに基づく学習環境デザインが、具体的にどのようなかたちで、学習者による実践的倫理知の生成を支援するかを確認するとともに、「ピア・グループ」モデルに基づく学習環境デザインの限界を明らかにした。

終章では、以上の研究結果を踏まえた総合的な考察を行うとともに本研究の成果と今後の課題を明らかにした。本章では「ピア・グループ」を、学習者が既存の社会・文化との関わりの中で、自らの意味を生成し、それをより個人的なものへと展開させることを支援する学習環境デザインのモデルとして意義づけた。「ピア・グループ」とは、学習者自身の具体的でインフォーマルな人間関係に基づいて構成される学習環境デザインのモデルであり、これは「同じ生徒であること」のみを基準とする多くの同輩支援アプローチと異なっている。本研究の成果は、メディア・リテラシー教育の学習環境デザインを構成するための視点として学習者自身の人間関係という視点を提示したことであり、さらにこのような視点に基づく学習環境デザインのモデルを、複数のフィールドを対象とした質的調査によって導き出したことにある。

注

- (1) Shotter, J. (1993) *Cultural Politics of Everyday Life: Social Constructionism, Rhetoric and Knowing of the Third Kind*. Toronto; University of Toronto Press.
- (2) 濱嶋朗・竹内郁郎・石川晃弘(1997)『社会学小辞典(新版)』有斐閣